

(昭和六十三年一月二十九日 研究例会報告)

江戸時代における 中国俗文学の受容

井上泰山

詩や文に代表される中国の伝統文学が早くからわが国にもたらされて文化の源泉となつたのとは対蹠的に、小説・戯曲などの所謂俗文学が広く一般の人々の目に触れるようになったのは江戸時代に入ってからのことである。初め文言小説を中心として行なわれた翻案の作業は、江戸中期に至つて次第に白話文学へとその対象が拡大され、さまざまな小説類に対して訓点・語釈が施されていく。それら中国の俗文学が国文学に及ぼした諸々の影響については、既に諸家の争つて説くところであるが、中でも広く受け入れられたのは明代の長篇小説『水滸伝』であつた。

享保十三年(一七二八)の岡島冠山訓点『通俗忠義水滸伝』をはじめとして、『水滸伝』に対して施された訓点・語釈の類は夥しい数にのぼるが、それら数ある語釈の中で、施注語彙選定の妥当性並びに語釈の精確度の両面からみて恐らく当時の最高水準を示すと覚しきものに、陶山南涛の『忠義水滸伝解』(『唐話辞書類集』第三集所収)がある。宝暦七年(一七五七)刊行に係る本書が、底本全体の六分の一にも満たぬ第十六回までの語釈しか収めないのはいかにも残念であるが、残された僅かな部分からでも『水滸伝』の言語に対する注解者の態度を窺い知ることは可能である。全十六回に対する語釈を仔細に検討してまず第一に気づく事は、俗文学を俗文学たらしめる重要な鍵

ともいふべき虚詞(論理を支配する機能語)に関する明確な認識が既に備わっていることである。

幸い本書は虚詞に対する説明を第一回に於て集中的に行なう体裁をとっているので、そこから幾つか具体例を示せば、たとえば「坐下」という語に対して、「坐スルコトナリ、坐ト一字ハ呼ニクキユヘ、下ノ字ヲ付タルモノナリ」といった説明が加えられる。ここで単に「呼ニクキユヘ下ノ字ヲ付タ」と説明することの妥当性を云々し、補語としての概念規定を欠くことの未熟さを問うことは現代人にとつていとむたやすいことである。見逃してならないのは、この説明の中に、動詞「坐」と補語「下」との意味上の軽重を区分する視点が既にはつきりと示されていることであり、同時にそれは、中国の俗文学における必然的傾向としての言語の多音節化への指摘にも連なるものである。虚詞に対する姿勢を窺うに足る例をいま一つ示そう。「領了」の語釈に次のようである。

了ノ字無意、華語ハスベテ音ナルガユヘニ、一字ニテ領トバカリハ呼ニクキ故ニ、語尾ニアラズ又ハ着ノ字的ノ字等ヲ付タルモノナリ、何方ニテモ右ノ如ク心得ベシ、又或ハ了得了解未了等ノ了ハ各別ノコトナリ、是等ハ了ノ字ニ意アリ

「了」一字にも助詞・動詞両様の用法があり、状況に応じて区別する必要があることを説いたものである。これとても現代人の目から見れば自明の事であり何ら奇とするに足りぬ主張ではあるが、漢文解説にあたり、漢字一字一字に同じ比重を置いて読む訓読を唯一の手段としていた当時の大多数の人々にとつて、より細かなニュアンスを伝える虚詞の存在への指摘は、恐らく相当に新鮮な感動をもつて迎えられるに違いない。

ところで、こうした虚詞に対する厳密な姿勢は、そのまま俗語研究への科学的態度につながっていく。「慚愧」という語に付された次の注釈は、注解者の『水滸伝』への注釈の態度であると同時に、広く俗文学全体に対する注釈の姿勢をも示すものと考えてよいであらう。

二字トモニ恥ト訓ズル字ナレドモ、俗語ニテ慚愧ト連綿シテハ、ハデノコトニアラズ、マズカタジケナイト云コトナリ、謝天地ト云ガ如シ、世上ノ推量俗語ノ輩ガ、慚ト云字義ニテ、ムネンナハツカシイナドト心得テ居ルハ沙汰ノ限リナルコトナリ、総体、俗語ハ語ノ転ジ来ルコト多シ、ソレヲ合点セズニ臆断ニテ俗語ヲ読得タリト覚ルハ可笑ノ甚シキナリ、総体、俗語ヲヨクスマサント思ハズ、華音ニ通ジ、小説ノ書ヲ博ク覽テ、一タトクト吟味シ、扱又総体ノ文学訓詁ニ通ズベシ、右三ヶ条一ツモ欠テハ通ジガタシ(後略)

俗語は単なる「推量」だけでは到底解説困難であり、「華音ニ通ジ」た上さらに幅広く用例を蒐集し、互いに吟味検討して初めて正しい訓詁に到達しうる、とする主張は、二百三十年の間を隔てた今日においてもなお色褪せぬ真理である。

宝暦七年、岡島冠山訓訳による『通俗忠義水滸伝』の刊行以後、中国白話文学の代表作としての『水滸伝』の名声はいよいよ高まり、『日本水滸伝』をはじめとして、『女水滸伝』『忠臣水滸伝』いろは水滸伝』など各種の翻案物まで生み出され、俗文学普及に大いに貢献することになるのだが、こうした『水滸伝』ブームの背後に、上述の如き、『水滸伝』が俗語を基調として書かれていることをはつきりと認識した上で、訓読を離れ中国語の原音によつて『水滸伝』に接することの重要性を

力説し自らそれを語釈において実践した人々が存在したことは、江戸時代における中国俗文学の流行とその影響を考える上で見落すことのできない重要な側面であると思われる。

残された紙面で戯曲の類にも目を転じておきたい。中国の戯曲はいつ頃わが国にもたらされ、どのようななかたちで受け入れられたのであろうか。

『西廂記』を含む所謂元代の雜劇が正保の頃までに渡来していたことは、現存する目録類によって確認することができ、又、徂徠や白石などがこれを読んでいたらしいことも『南留別志』『俳優考』等によってある程度推測できるものの、『水滸伝』の語釈に匹敵するような、具体的にどう読まれたかを示す資料は極めて少ない。たしかに、遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』や作者不明の『劇語審訳』などが伝存するとはいえ、前者は中国人諸家の手になる『西廂記』の注釈を折衷したものであることが既に伝田章氏によって明らかにされており、後者についても、刊行年・出所ともに未詳である以上、戯曲の普及度を測る資料としてはいま一つ弱い。それ故、今のところ、江戸時代において戯曲は小説に較べて一般への浸透はかなり遅く、しかも小説ほどには広汎な支持者を獲得できなかった、との結論を下さざるを得ないのである。その原因はどこに求められるであろうか。扱われた題材の特殊性、受容者層の相違、等さまざまな事情が考えられようが、やはり「戯曲は、その実際に接することが出来難く、理解も出来ず、一般に広まることは遅れた」（中村幸彦著述集第七卷「唐話の流行と白話文学書の輸入」というのが真相であったろう。小説と戯曲の受容の仕方の違いは、日本人の中国文化受容のあり方を考える上で重要な指標にもなりうる。後考を重ねたい。